
この想い伝えきれなくて。

ミリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この想い伝えきれなくて。

【Nコード】

N5670D

【作者名】

ミリン

【あらすじ】

今、話題の鏡音リン・レンの小説です。一応、レン×リンでレンが主人公です。VOCALOIDを知らない人でも楽しめるような内容に思うので。

この想い伝えきれなくて プロローグ

「この想い伝えきれなくて プロローグ」

いつだって独りだった。

残ってる記憶は殆どない。

……でも、一つだけ。

本当に一つだけだけど……覚えてる記憶がある。

……思い出せる記憶がある。

……小さい頃に遊んだ……

一人の女の子の事。

血も繋がってないのに……

……同じ名字で……

年齢も一緒だった。

もし、もしもだけど。

……願い事が……。

一つでも叶うのなら……。

叶えて欲しい。

もう一度だけ、あの子に会わせて下さい。

君と僕

「おつかれさま」

「お疲れ様です。」

「おつかれ」

歌の収録が終わるとゾロゾロと大勢のスタッフが出てくる。
俺、鏡音レンもその中に混じって事務所を出ようとする。

……が。

「あつ！レン君？ちょっと残ってくれる？」

少し遠くの方から俺に声がかけられた。

……聞きなれたその声の正体は……。

……後ろを振り返ってみて、まず最初に目に付いたのは長く垂れた
青い髪……。

「げっ……先輩……。」

……思わず声が出てしまう……。

だって……そこに立っていたのは……。

俺の二つ年上の先輩だったのだから……。

「ひどいんじゃない？いきなり……。」

先輩は「私だって好きでレン君を呼んでるじゃないのに」とぶつぶ
つ文句を垂れながら腕を組んだ。

……本当に好きで呼んで来てるんじゃないかなさそうだ……。

「まっ……いいや。んで、何なんです？」

「……プロデューサーが話したいって……。」

先輩は目を伏せながら物を言った。

「プロデューサー？……………またかよ……………」
俺も俺で思わず声が出てしまった。
何となくは……………分かっていたさ……………だけど……………
……………またかよ。

「えと……………レン君その……………」

先輩は何かを言いかけた。

でも、俺は……………

「別に……………先輩には関係ないからさ……………」
ただ一言だけ言い残し俺はこの場を去った。

”また”

その言葉が意味する事。

まっようは……………

一回目以降、もう一回……………同じ事があった。

……………または……………ある。

……………って事だよな。

……………俺には……………良く分かんねえ……………

「あっ……………」

着いちまった。

プロデューサーの部屋の前……………。

「……………はあ……………」

ため息さえも出てしまう。

……本当に何言われるかは分かってるんだ……。
……だからこそ、
嫌なんだ。

——ねえ？聞こえる？……届いてるかな？
貴方には……私の……
この、声が——

「……………」
頭の中に声が響いた気がした。
……………空耳さえも聞こえるようになってしまったのか……………？
……………。

「気のせいか……………」

一言呟き、俺は扉を開いた。
ギィ……………と、心なしか嫌な音が耳を触る。

「遅かったじゃないか。レン君。」

遠いキオク

プロデューサーから声がかかって無理やり笑顔を作り口を開いた。

「あつ……すみません。」

俺がその言葉を告げると、プロデューサーは「まあ良い。」と一言呟いた。

その言葉を聞いて俺がホツとしたその瞬間、プロデューサーは口を開いた。

「はああ……それよりさあ……レン君……」

呆れたようにプロデューサーは言葉を発した。

「何ですか？」

プロデューサーの言葉を聞いた後、続けるように俺が言う。

その言葉を聞いたプロデューサーはさらに俺に続けるように言葉を発した。

「あのねえ……君……」 VOCALOID2 ” って言っんだよ？
分かってるの？」

「……………」

それに俺は何も答えなかった。

……………好きで生まれたんじゃないから……………。

そして、もう一つ。

——俺の記憶がないから。

数年ほど前、気がついたら、先輩が側に居て俺に向かってこう言ったんだ。

「こんにちは私の名前は初音ミク。君の名前は”鏡音レン”。よろしくねっ。」

”君……レン君はvocaloidって言って、たくさんの人に歌を届けるアンドロイドなのよ。”

そう告げられたのを覚えている。

……記憶……

俺が先輩と会う前の記憶……

そう考えたら一つだけ有ったんだ。
心の中に残っている記憶が……。

君とのキオク

何時だっけかな……

そう。

あれは、俺がまだ幼い頃だった。

「こいつ生意気だ〜！」「本当だ〜！ピン止めにリボンなんて〜」

「やめてよ……痛いよぉ……誰かぁ……！！！」

不意に声が聞こえ、俺は足を止める。

そこで俺は……何だろうと思いつながら、声も聞こえる方へ足を進ませていく。

そこに居たのは……。

リボンと白いピン止めをつけた、とっても可愛い女の子……。

年は……俺と……同じ年くらいか。

なんだ……？あの光景は……？

女の子が髪を引っ張られて……蹴られて……。

幼いときの俺はその子が何をされているか、とか良く分からなかったんだ。

でも……何だか胸が凄く苦しくなって……。

締め付けられるような思いになって……。

その場を見ていられなくなって……。

「やめろ……！やめろ！！やめろおおお！！」

思わず俺は叫んでいた。

叫んだ直後に、俺はそいつらに近づいて……。

……その女の子を自分の元へと抱き寄せた。

「げっ……！みんな！逃げるぞ！」

誰か一人が叫んで一斉にそいつらは逃げていった。

逃げていったのを確認して俺は女の子を離してあげた。

「……大丈夫？痛いところとかない？」

俺は恐る恐るその子に聞いた。

……反応はない。

というか……この状況で答えられるわけねえか。

何て思っていたら、その子は出来るだけ笑顔を作って俺に向かって言うんだ。

「ありがとう。」

……ってな。

今でも分からないけど……。
その瞬間に俺は思った。

好きになったかも……。

……それが人生初の……

一目ぼれと、初恋だったんだ。

「家まで送ってくよ。」

無意識の内に俺は呟いていた。

その声はやはり女の子にも届いていたらしく。

「えっ？ううん大丈夫だよ」

と言う返事が返ってくる。

「何て言んだろ……。その……、本当にありがとね」

不意にその女の子はまた俺に礼を言うんだ。

……少し頬を赤くしながら……。

「えっと……機会があつたらまた会いたいな。じゃあ、またね。」

話しながら歩いていると家が近いのかその子は俺にそう伝えた。

「あつ待って！」

俺は止めるかのようにその子にそう伝えていた。

「え？」

「その……名前は……？」

「私の名前？」

「……うん。」

その子は信号を少しづつ歩きながら、少し俺との距離が離れた所で俺に向かって振り向いてこう言ったのだった。

「私の名前は鏡音^{かがみね}……」

そう。

まさにこの時からだ。

記憶がないのは…………。

（名前を聞いてる途中だったのに…………どうしてだよ。）

意識を失う前……………っていうのかな。

その時見た景色は……………確か…………。

トラック……………？

っていうか……………車みたいなのが……………女の子に向かって走ってくる……………。

……………っていうのを見たのが……………

最後だった。

傷ついたココロ

意識を失う前に見た景色。

それと、女の子の声。

鏡音……………って言ってたよな。

もしかしたら俺と同じ名字……………なのかな。

そうだったら繋がりがあるみたいで何か嬉しいんだけどな。

……………でも、もし。

もしもだけど……………。

女の子が……………あのまま……………。

……………トラックに轢かれてなけりゃいいんだけど……………。

「………って聞いているの！？レン君！君は……………パワフルでチャームिंगな歌声で歌うVOCALOID2なんだよ！？分かってるの！？」

ダン……………！！！！

俺がボーっとしてしているとプロデューサーは机を大きく叩いた。

ダン！と……………響き渡らせるかのようにな……………。

「それなのに……………君は……………」

プロデューサーに言われて毎度毎度イヤな事……………。

それがこれだ。

【ちゃんと歌え】 【お前はアンドロイドなんだ】 【なに言われてる
か分かってんの】

もうイヤだ。

俺だって好きでこう生まれたんじゃない。

アンドロイドはアンドロイドらしくしろってか。

ふざけんな。

ただ歌を歌ってれば良いだけの機械じゃないんだぞ。

俺にだって……………” ココロ” ってモノがある。

人並みに考えたりすることが出来るんだ。

…………… だれか教えてくれよ。

オレハモノ？

歌ッテレバイダケ？

オレハ……。

……モノ？イラナイモノ？

「…………プロデューサー…………。」

俺は震える声を搾り出した。

「何だい？」

…………っ

「すみませんでした。」

俺は一言呟いて事務所を飛び出した。

「レン君！」

最後に俺を叫ぶ声が聞こえた気がしたけど俺は、走り出した足は止められなかった。

雨が降ってるにもかかわらず全力で走った。

…………何でだろう…………？

どうして俺には、あんな要らない事を考えられるココロがあるのだろう。

…………誰がそんなものをつけたのだろう…………。

…………いらねえよ。

…………そんなこと考えられる”モノ”なんかいらねえよ…………。
どうせ、

…………どうせ俺は…………。

ただのロボット。

アンドロイドなのだから…………。

…………そんな事を考えていたら家に着いた。

鏡の向こうの女の子。

「……………っ」

鍵を開けて、ドアノブに手をかけて俺はゆっくりとドアを開けた。

「ただいま……………って誰も居ねえか。はは……………」

”誰も居ない”

そんなの……………、いつものことだろ？

…なんでだよ……………。

……………なんで……………？

……………どうしてだよ……………！

どうして、今日に限って……………

こんな……………

こんなに……………

……………涙が出るんだよ……………！！

……………辛いんだよ……………！！

気がついたら俺の頬には大粒の”涙”が伝っていた。

何がそんなに辛いんだろう？

何がそんなに悲しいんだろう？

何がそんなに悔しいんだろう？

「俺には……………分からねえな……………」

一人ポツリと呟いた。

「へ？何が分からないの？」

……………ちょうどその時だった。

……………リアルな空耳が耳に入ってきたのは。

「……………俺、ついに空耳まで聞こえるようになったかあ……………」

などと呟いてみる。

自分が正常な人間かを確かめるためにな……………。

……………が、俺は正常な人間じゃなかったらしい……………。

「ひ、ひどいよぉ！空耳じゃないのに！」

はつきりとその返事は返ってきた。

……………しかも、割と可愛い声で……………。

「と、とにかく！鏡みてよ！か・が・み！」

……すげえ……普通に会話しちゃってるよ……。
……などと思いながら……振り向いて後ろの鏡を……。

「!?!」

……声にならない声が出た……。
……それもそのはず……。

「あつ　よかったあ。やっと気づいてくれた……。」

鏡の……鏡の中に女の子が居たのだから……。

「お前……誰？」

俺は……おそろおそろ、その女の子に問いかけた……。
信じられない光景だったのだから……。
鏡の中に人が居る……。
……っていうか、自分でも凄くと思う……。
こんな普通に話しているのだから……。

「私の名前？えーと……。」

「名前を聞いてんじゃねえ！」

「ふえ!?!」

その女の子はビクッと体を震わせた。

「俺が聞いているのは……。その……どうして「コ」にいるのかって事だよ。」

俺の言葉を聞いてその子は目を伏せた。
そしてゆっくりと口を開いて俺に告げた。

「えーと……………あはは。……………ごめん。」

ごめん？

「おい……………何で謝るんだよ？」

意味分かんね、と続けて言おうとした時、女の子は口を開いた。

「え、えーと……………、分かんないの。」

三分の四拍子ぐらいの間が空いて、その女の子は俺に向かってボソリと呟いた。
分からない？

「ここに理由が……………か？」

コクンとその女の子は首を縦に動かした。

……………

存在

俺は何も言わずに携帯を取り出した。

「ん？誰に電話するの？」

心配そうに聞いてくるその子に向かって一言。

「警察。」と答えた。

「ふわあああ！！！！」

当然のごとく、もの凄く驚いた。

俺は冗談のつもりだったのだが、余りにもその反応が面白かったので誰かに電話をかけるマネでもしようか。

ピポパピポ、音のマネもしっかりしてみたりする。

モノマネが得意ってこういう時便利だよなあ……。

「あつ……えつと……、わた……私そんな邪魔……だったかなあ？」

「……えつ……と……」

うるうる、今にも泣きそうな瞳でこちらを見つめられて……思わず俺はドキッとしてしまう。

……どうしよ、そんな瞳で見られると……俺……まともにあいつの顔が見れ……ん？

” あいつ？”

そっいえば……俺……あいつの名前……聞いてないよな……。

……聞くしかねえ……よな？

あつでも、その前に……。

「お前の事、邪魔なんて思ってたねえから安心しろ。さっきのは冗談だ。」

持っていた携帯をポケットの中にグイとしまいこんで、「ほら」と両手を見せる。

すると……安心したように俺の顔をみて、ぱあっと笑顔になった。

「ふえ？そうなの？……よ、良かったあ。」

「……何だろう？今初めて会ったのに、」前にも会った」見たいな感じがしてならない。

「……昔、会ったことがあるかのような……そんな違和感。

「……声も聞いたことがあるし……。」

「……そういえば、私の名前……まだ、言ってないよね？」

と、そんな俺の考えに割り込むかのようにして女の子は口を開いた。
「……聞こうと思ってた事だけど……まあ、いいや。」

「私の名前は、鏡音リン（かがみね りん）。貴方の名前は？」

”名字が同じ”

そう分かった瞬間だった。

名前

あいつの名字を聞いた瞬間、俺はもの凄く驚いた。

……その理由は、あいつが俺と同じ名字だったからだ。

……双子とか兄弟のような血縁関係……なわけないよな？

……

「……おい。」

「ん？」

「……聞きたいんだけどさあ……何でお前俺と同じ名字なわけ

？」

「え……？」

その言葉をあとに数秒間の間が空いた。

……本当に何なんだよ……？

そう思った直後、あいつは口を開いた。

「……あつ、貴方と同じ名字が良かったから……かな？」

「……なっ……！」

……いきなり……何言うんだよ……？

……まったく……。

変なヤツ……。

そんな事言われたら……俺……。

……胸がドキドキしまっじゃねえか……。

……何て思ってたなら……。

「……えっと……ま、まあ……それは冗談なんだけどね あはは

」

「……………」

「……冗談だったと聞いて、ちょっと残念だったような……そんな気もした。」

「……ま、まあ……別にさあ……アイツの事なんか……どうでも良いけどさあ……。」

「……そ、それは置いて……。」

「……んで、結局何なんだよ……、リ、リン………」

「あれれ？あれれ？リンって……言ってくれた？」

「……う、うるせえ……！」

「……嬉しいな。あ、ありがと……ね？えっと………」

「……こういうやり取りをして俺は初めて気づいた。」

「……自分の名前を言っただけだったという事に。」

「……しゃーねーなあ……。」

「……一回しか言わないからな。良く覚えとけ。俺の名前は……鏡音レンだ。」

「……レン……えっと、ありがとね？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5670d/>

この思い伝えきれなくて。

2010年10月17日05時09分発行